



Title	日本語の種類について 「アルタイ型言語」の解明を目指して
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 4, 157-171
Issue Date	2014
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/55127
Type	bulletin (article)
File Information	11風間 論文.pdf



[Instructions for use](#)

日本語の類型について
—「アルタイ型言語」の解明を目指して—

風間 伸次郎
(東京外国語大学)

0. はじめに

(2 つ以上の) 言語が似ている、という場合それは、①系統関係による、②接触による相互影響で生じた、③類型的によくあるタイプである、のいずれか (もしくはその複合) であると考えられる。本稿では日本語に関して、上記のそれぞれの立場に拠っていると思われる先行研究をまず紹介する。しかる後にそのそれぞれの言説について検討し、世界の諸言語における日本語の位置づけを再考する。

1. 先行研究

1.1. 松本 (2007)

松本 (2007) は、いくつかの特徴に基づいて世界の言語を分類し、日本語をその北方群、中でも「環日本海諸語」に位置付けている。これらの特徴は類型的なものといえるが、松本 (2007) は長年に亘って変化しにくい特徴であるとみなし、系統的な分類として下記の表 1 のような分類を提示している。

表 1: ユーラシア諸言語の系統分類

(松本 2007: 207、太字やフォントの大きさの変更は筆者による)

系 統 関 係	所属語族・言語群	共有特徴	
ユーラシア 内陸言 語圏	中央群	セム語族 (アフロ・アジア B) イント・ヨーロッパ語族 ウラル語族 チュルク語族 モンゴル語族 ツングース語族 トゥヴァン語族	複式流音, 体言型形容詞, 数カテゴリー, 単項型人称標示, 対格型格標示, 名詞 類別, 名詞類別*, 重複欠如*, 包括人 称欠如*
	残存群	カフカス諸語 シュメール語その他古代オリエント 諸語 バスク語 ケット語 ブルジャスキー語	多項型人称標示, 能格型格標示, 複式 /単式流音, 体言型/用言型形容詞
	周辺境界群	チュクチ・カムチャツカ語族 エスキモー・アリュート語族 チベットのビルマ語族	

太平洋 沿岸言 語圏	南方群 (オストリック大語族)	漢語 (中国語) ミャオ・ヤオ語族 タイ・カダイ語族 オストロアジア語族 オストロネシア語族	単式流音, 用言型形容詞, 数カテゴリー欠如, 名詞類別欠 如, 数詞類別, 重複形態法, 多項型人称標示*, 対格型格標示*, 包括人称*
	北方群 (環日本海諸語)	朝鮮語 <u>日本語</u> アイヌ語 ニブツ語	

*印を付したのは同一言語群の中で部分的な不一致を見せる特徴であるという。

環日本海諸語内部の異同について、松本 (2007) は次のように述べている。

環日本海諸語は、太平洋沿岸言語圏の一方を代表する言語群として、単式流音型、形容詞用言型、名詞における数カテゴリーの欠如、数詞類別、重複形態法という 5 つの特徴を南方のオーストリック大語族と共有する。しかしその内部を子細に眺めると、北のアイヌ語とニブフ語には多項型人称標示、中立型格標示、包括人称が現れるのに対して、南の朝鮮語と日本語は、少なくとも現状では、人称無表示、対格型格標示、そして包括人称の欠如という違った特徴を提示する。これについては、ニブフ語とアイヌ語、とりわけアイヌ語に見られる諸特徴が環日本海諸語の古い言語相を伝えるもので、朝鮮語と日本語がそれを喪失したために現状で見るような言語差が生じた。つまり、ここでも小規模ながら一方に朝鮮語・日本語、他方にアイヌ語・ニブフ語という形で、新・旧 2 つの言語層の違いが露呈している、とだけ述べておこう。

(松本 2007: 208-209)

さらに環日本海諸語を次のような「系統的」なグループとみなすことを主張している。

この言語群 (環日本海諸語：筆者註) は、もちろん通常の意味での語族とは同一視できないけれども、すでに述べたように、年代的にきわめて奥行き深いところにつながる可能性が高い。その年代は、もちろん日本の縄文時代以前、日本列島がまだ大陸の一部をなして、日本海があたかも内海のような様相を呈していた後期旧石器時代まで遡ると見てよいだろう。

(松本 2007: 125-126)

さらに松本 (2007) は日本語のいわゆる「ウラル・アルタイ的特徴」を検討し、併せて「日本語がウラル・アルタイ語と著しく異なる言語特徴 14 箇条」を示している (松本 2007: 43-72)。それは (上記の環日本海諸語の特徴とされているものの他)、開音節、アクセント、3 系列の指示詞、開いた体系の人称代名詞、動詞における人称変化の欠如、動詞に組み込まれた敬語法、明示的主格表示、ハとガの対立、オノマトペの多用、である。

1.2. Masica (1976)

Masica (1976) はインドの諸言語が持つ 30 の地域的特徴の現れについて、世界の他の諸地域の言語を検討した。その結果は以下のものであり、日本語はインドの諸言語と共通した点を多く示す言語であることがわかる。

Masica (1976) は多くの特徴の地理的分布を地図上に示し、インド的な特徴の多くがアルタイ諸言語を経由して朝鮮語や日本語へと連なっていることを示した。つまり Masica (1976) はこれらの言語間に見られる類似を地域的に連続する特徴として捉えている、ということになる。

なお次にみる表では、一部の特徴 (2, 5, 8, 10, 12, 16, 17, 18, 24, 26) を省略し、言語もシンハラ、アムハラ、ドイツ、スペインの 4 言語を省略した

表 2: Measuring Conformity to the Indian Norm (Masica 1976: 193-196)

		ヒ ン テ ィ ー	テ ル グ	ヘ ン ガ ル	日 本	ヒ マ ル	トル コ	チ ベ ット	中 国	ハ ン シ ャ	ロ シ ア	英 語	ス リ リ	アラ ビ ア	タイ
1	主節ではぼ OV 語順	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-
3	代名詞目的語が一般に定動詞の前	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	+	-	-
4	名詞目的語が従属節で動詞の前	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-
7	ほとんど後置詞のみ	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-
9	(補) 助動詞後続	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-
11	Adj は N に先行	+	+	+	+	-	+	-	+	-	+	+	-	-	-
13	Gen+N (属格名詞句先行)	+	+	+	+	+	-	+	+	-	-	-	-	-	-
15	Dem+N (指示詞先行)	+	+	+	+	+	+	-	+	+	+	+	-	-	-
19	Adj の比較の対象先行	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-
20	自他動詞の違い表示	+	+	+	+	+	+	-	-	+	+	-	+	+	-
21	自動詞から使役派生	+	+	+	+	+	+	-	-	+	-	-	+	+	-
22	他動詞から使役派生	+	+	+	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-
23	二重使役形を派生	+	+	-	+	-	+	-	-	-	-	-	+	-	-
25	'conjunctive' participles	+	+	+	+	+	+	+	-	-	+	-	-	-	-
27	一連の補助動詞	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	一連の与格主語構造	+	+	+	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-
29	与格主語高度に発達	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
30	多様な機能の have 無	+	+	+	-	+	+	+	-	-	+	-	-	-	-
	SCORE	30	30	29	27	25	24	18	13	12	11	8	5	4	1

1.3. 亀井・河野・千野編 (1996)

亀井・河野・千野編 (1996, おそらくは河野の筆によるものと思われる) は「アルタイ型言語」、という一つの類型をたて、日本語はこの類型の諸特徴を示す言語であるとした。

いわゆる「アルタイ諸語」、すなわち、チュルク語族、モンゴル語族、ツングース語族に属する諸言語に特徴的に見いだされる言語類型 (linguistic type) をいう。これらの3語族は構造的にはよく似ているが、基礎語彙に、厳密な意味での比較言語学的対応はみられない。

(中略)

このような構造は、語または要素 (形態素) が一定の「連辞関係」に従って、一定の配列の中にそれぞれの位置をもち、それが文法機能を果たしているのである。そこで、これらの言語の類型を「アルタイ型」と称することにしたい。このような類型的特徴を示す言語は、存外、多い。いわゆ

る「アルタイ諸語」、日本語、朝鮮語、旧アジア人のニブフ語¹などは、みな、この「アルタイ型」の言語である。さらに、インドの原住民ドラヴィダ語族もそうであるし、その影響で、現代のインドのアーリア族（印欧語族）の諸言語にも述語動詞を文末におくという特徴がみられるので、ときに「インド・アルタイ諸語」（Indo-Altaic）と称することもある。

（亀井・河野・千野編 1996: 28-29）

河野（1989）には、さらに次のように述べられている。

印欧型の言語が範例的な（paradigmatic）言語であるのに対し、アルタイ型の言語は、連辞的な（syntagmatic）言語であると言うことができるであろう。

（中略）

なお、類型の名称としては、抽象的な名前よりも、「アルタイ型」とか「印欧型」というような固有名詞を用いる方がよい。類型は、本来、個体を離れたものではないからである。

（河野 1989: 1577）

ただ残念なことにこれ以上の記述は無く、「アルタイ型」の言語類型とはより具体的にはどのようなものであるのか、まだ十分に明らかであるとは言えない。

1.4. 先行研究のまとめ

上記の3つの先行研究の立場の対立を、より際立たせて示すならば次のようになろう。すなわち、日本語的な（もしくはインド的、アルタイ的な）特徴は、

- ①松本（2007）：一つのきわめて古い歴史的起源に遡るもので、それを環日本海諸語と呼ぶ。
- ②Masica（1976）：一つの地域特徴で、インドからアルタイへと続く言語地域をなす。
- ③亀井・河野・千野編（1996）：一つの類型（「アルタイ型」）で、このような特徴を示す言語は存外多い。

この3者の示す根拠をよく検討することは、日本語の特性を明らかにすることと同時に、言語間の類似の理由となる3つの要因の相互関係を解明することにもつながると思われる。

2. 考察

以下では3つの先行研究が示す根拠について検討を加えて行くことにする。

2.1. 松本（2007）についての考察

2.1.1. 「用言型形容詞」

たしかに朝鮮語、ニブフ語、アイヌ語の形容詞は動詞的な形態変化を示し、広い意味での動詞の下位分類とすべきものである。さらに意味の面でも、次のような動詞的特性を示す。すなわち、「大きい」は「大きくなる」、「明るい」は「明るくなる」のような変化の意

¹ 亀井・河野・千野編（1996: 29）、松本（2007）ともに言語名として「ギリヤーク語」を用いているが、本稿では「ニブフ語」に統一することとした。

味を同時に示す（梅田 1991: 9, 服部 1955: 769, 田村 1988: 18）。

このような上記 3 言語の状況と比べると、日本語の形容詞の動詞的な性格は大きく異なっている。共時的にみても、まず形容動詞（ナ形容詞）が名詞的变化を示す。イ形容詞の変化も、動詞とは全く異なっていて、語幹の独立性は高い。通時的には、動詞アリの助けを借りることによって諸活用形を整えてきた（高かったく高く あった）。すると残るのは「高-シ」「高-ク」の 2 つの語尾ということになる。このうち-クについて、阪倉（1966: 329-331, 379）はこれをコトゴト-ク、ケダシ-ク（コトゴトは名詞、ケダシは副詞）の例に見るように異なる品詞に付加できる体言派生の付属語と考えている。「いはゆる形容詞の連用形（副詞形）なるものは、元来は、このクによって派生された一種の情態言であるにほかならない。前述のやうに、この種の接尾語は形式名詞にちかひのであるが、かうした形式名詞が副詞的機能を発揮することは、たとえば現代語の、「うまいことやれよ」（＝うまくやれよ）などといふ言ひ方にもみとめられる」としている。形容詞語幹と名詞による複合語形成は、名詞と名詞の複合語と同じ構成である（「早-足」、「雨-足」）。

ここで沖縄に目を向けると、次のような記述がある。

基本語幹の独立性については、用例が少なく証明しにくい、『おもろそうし』（1532-1623）にあらわれる〈なだかつぎ（名高い剣）〉〈なだかこしらい（なだかいこしらい）〉という用例や、『語音翻訳』（筆者注：『海東諸国記』1501、ハングルによる資料）に〈ウブミチ（大路）〉〈クーミチ（小路）〉がみえていること、現代方言に〈アカー（赤いこと）〉〈シルー（白いこと）〉〈タカータカー（高いこと）〉という形が残存している。古代日本語の形容詞は、阿加陀麻（赤玉 記、筆者注：以下万葉仮名省略）、（青山 記）、（高光る 記）、（甚泣かば（いたなかば） 記）のように語幹のまま名詞や動詞を修飾したり、（なづの木の清清（さやさや） 記）。（股長に（ももながに） 記）のように、語幹のまま述語になるなどして、語幹の独立性が明らかである。

（中略）

比べて、基本語幹に新しい形成素が複合した語幹の独立用法は豊かであり、古代日本語と通ずるものがある。①連体修飾をする あからかさ〈赤ら傘 16 の 12〉 ②述語になり文を終止する おこのみのたかさ（お造りになった高さよ 4 の 25） ③名詞になる わかさあしときや（若さがあったときには 7 の 36）

（中略）

敬称接頭辞／み／・／ま／がついて敬意表現となる。みかなしのてだ（御愛しのテダ 14 の 65）
まうれしや（真嬉しや 9 の 16）

（外間 1971: 101-110, 一部中略）

宮古の諸方言などには、こうした名詞的性格が残っている。下地（2006: 101）によれば、「伊良部島方言の形容詞語根は、名詞のスロットを埋めることで名詞的に働くことができる： *taka+pitu* 「背の高い人」という。

以上に見るように、（少なくとも歴史的には）日本語の形容詞はむしろ名詞的とみるべきものである。

2.1.2. 数詞類別

まず、「中期朝鮮語では、名詞修飾構造においては、数詞が名詞を直接修飾する型が圧倒的に多い」(門脇 1992: 229)とあるので、朝鮮語はかつて数詞類別を持たない言語であった可能性が十分に考えられる。

日本語の助数詞に関しても、古くは「七車 (サクルマ)」「六爪 (むつま)」のように基数に名詞が直接ついた例も見られ、助数詞は名詞が形式化したものとみられている(国語学会編 1955: 544)。漢語の影響により発達したとする説もある。

両言語とも歴史的に漢語の強い影響を受けてきた言語であり、漢語の影響下において発達してきた可能性は十分に考えられる。このことを支持する一つの例として、例えば内モンゴルのモンゴル語において助数詞が用いられることを指摘した研究(蓮見 1998)をあげることができる。

ニブフ語の数詞類別は、現在共時的には数詞そのものによる類別となっている。数詞類別についてアウステルリッツ(1990: 176)は、「アメリカ西海岸から、タイまでの沿岸地域に広範囲にみられ、私には沿岸民族と関係のある特徴であるように思える」としている。

Haspelmath et al. (2005, WALS)にはやはり Numeral Classifiers の項目(Gil 2005)がある。これをみると、その分布は必ずしも環太平洋的とは言えない。数詞類別の義務的な言語が最も密集しているのはチベット・ビルマ語族及び東南アジア大陸部の孤立型言語群である。

他方、任意ではあるものの、アルタイ諸言語の中でもトルコ語、ウイグル語など、チュルク諸語には助数詞を用いるものがある(風間 2003: 258)。

2.1.3. 数のカテゴリー

英語をはじめとする印欧語では、two books のように、複数の数量を示す数詞等が修飾していれば、名詞を複数形にしなければならない。これに対し、モンゴル語やトルコ語では逆にこのような場合に複数接辞を用いることができない(風間 2003: 257)。少なくともこの点で、「数」は文法カテゴリーであるとは言えない。数の標示は基本的に義務的でなく、範例的な対立を示さない。

特にモンゴル語では、①機能や分布の異なる複数接辞がいくつも存在する、②機能では近似複数 vs 等質複数の対立、分布では名詞句階層に沿った相補的分布が観察される、③二重複数形がいくつもある、などの点で印欧語における文法カテゴリーとしての数と大きく異なっている(山越 2001, 風間 2003: 258)。

他方日本語において、古代語では、現代語よりも複数表示を頻繁に行っていたという(小田 2010: 288, 例も)。無生物の複数形なども現在より多く用いられたようである。

そのあたりに、照り輝く木ども立てり。(竹取)

渚を見れば、船どものあるを見て(伊勢 66)

そもそも複数形が義務的であるか否か、を判断することは難しい。Haspelmath et al. (2005) 所収の Haspelmath (2005: 143)には名詞の複数の出現の義務性が通言語的に検討されている。しかしそこでも、その判断は難しく、何らかの記述があれば数は義務的であるものと

判断したため、実際には表示が任意である可能性もある、と記されている。なお松本 (2007: 111) においても、アルタイ諸言語のうち、アムール流域より南のツングース諸語では、数は必ずしも義務化されていない、としている。

さらに、朝鮮語の複数接辞 *-duul* が、等質複数しか表せないことや、主語を示す場合には文中の要素に遊離して現れ得ることに注意すべきだろう (梅田 1991: 63, 朝鮮語研究会 (編著) 1989: 240-241)。ニブフ語の複数接辞 *-xyn* も名詞にも動詞にもつくという性質がある (服部 1955: 760, 761, 762)。

つまり松本 (2007) のいう「環日本海諸語」の内部でも、複数形の性質についてはさまざまな違いが観察される。

2.1.4. 重複法

松本 (2007) はアルタイ諸言語に重複法は存在しないとしている。しかしいわゆる反響語や語頭音節の重複による形容詞の強調は、モンゴル諸語とチュルク諸語に広くみられる。

ool ool 「山々」、*os mos* 「水やら何やら」、*bəd bədsəər* 「長いこと考えているうちに」、*ob olaaj* 「真っ赤な」(以上はモンゴル語、一ノ瀬 1992: 289-290 による)

bardak mardak 「コップやら何やら」、*opolgun* 「すっかり熟した」 < *olgun* 「熟した」(以上はトルコ語、竹内 1989: 451, Swift 1963: 123 による)

ただしこの形態的手法は両語族間においてあまりにもよく似過ぎているので、相互影響によって広まった可能性が高いと思われる。ツングース諸語のみは一般に上記の2つの形成法を用いないが、モンゴル語の影響を強く受けたソロン語では頻繁に用いられる。

このように重複法は、その種類にもよるかもしれないが、接触によって広まる可能性のある形態的手法であると考えたい (例えば Jacobson and Waugh (1979) には、スラブ諸語の子音交替型重複表現がチュルク諸語の重複をモデルにしているという指摘がある)。したがって重複法を歴史的に変化しにくいものとみなし、系統的な判断の材料とする松本 (2007) の方法論には疑念を呈したい。

2.1.5. その他

松本 (2007: 68) は、日本語や朝鮮語の指示詞が3系列であるのに対し、アルタイ諸言語の指示詞はもっぱら全て2系列とみているが、これは正しくない。トルコ語が3系列であることは良く知られているし、西岡 (2004) によればカザフ語は6系列である。

松本 (2006) では母音調和に「ユーラシア内陸型」と「太平洋沿岸型」の2種をたて、アルタイ諸言語の母音調和と環日本海諸語の母音調和を別物として区別しようとしている。しかしツングース諸語の母音調和に関しては、太平洋沿岸型であることを認めざるを得なくなっている (松本 2006: 361-390)。

松本 (2007) のいう流音タイプに関して、アルタイ諸言語の中でもツングース諸語の一部 (ウデヘ語、オロチ語、ネギダル語) は例外となり、流音を1系列しか持たない。ただしこれら3言語は、かつて有していた *r* を失ったものと考えられるので、歴史的にみれば松本 (2007) の仮説とは矛盾しない。

2.1.6. 松本 (2007) に関するまとめ

松本 (2007) の仮説は魅力的ではあるものの、その根拠のいくつかには問題があることがわかった。特に用言型形容詞と数詞類別の2点に関しては、歴史的に系統を判断する基準としては、むしろ環日本海諸語を否定する根拠として取り上げられるべきものであると考える。

2.2. Masica (1976) についての考察

2.2.1. 語順

1~15 は Greenberg 以来指摘のある語順の相関的な特徴であり、一言でまとめるならば、head-final な語順であるということが出来る。世界の約半数の言語は SOV 語順を有するので、この語順に関する特徴の束はあまり重要な意味を持たないものとする。むしろ下記にみる他の諸特徴と head-final な語順との相関関係が重要であろう。

2.2.2. 派生的な文法カテゴリー

20~23 は、派生的な文法カテゴリーを有するか否か、という問題に還元できると考える。「範例的」な言語では文法カテゴリーの標示は義務的であり、その種類は一定である（「一定範疇言語」(峰岸 2000)）。その範例的な諸対立は一つの形態素に集約されようとする。他方、「膠着」型の不定範疇言語はそうではない。使役などの要素からなる態など、任意の文法カテゴリーをもつ（この場合に、default な意味が無標示の形で表わされる時、それをゼロ形態素とは考えないものとする）。任意であるがために、逆に同じ機能の接辞が1つの語幹に2度つくようなことも起きる。このような二重の形は、範例的な対立に基づく屈折的な言語に対して、いかにも膠着的、不定範疇的で、連辞的（後述）であるように見える。ここではそのような二重の形として二重使役形を取り上げる。

インド言語圏におけるウルドゥー語には、次のような形での二重使役形がある（以下は萬宮 2012 の記述に基づく）。すなわち、自動詞から他動詞、他動詞から使役動詞が派生される (uṭhnā (起きる) > uṭhānā (起こす) > uṭhwānā (起こさせる)) が、この形態的なプロセスは他動詞にも適用され、他動詞から使役動詞、使役動詞からはさらに二重使役動詞が派生される (khānā (食べる) > khilānā (食べさせる) > khilwānā ((仲介者を介して) 食べさせる))。

māī	ne	un	ko
私 OBL.1.sg.	ERG.pp.	彼ら OBL.3.pl.	DAT.pp.

gānā	sunāyā
歌 NOM.m.sg.	聞かせる PERF.m.sg.

「私は彼らに（直接）歌を聞かせた（歌ったのは「私」）。」

māī	ne	un	ko	āīpāḍse
私 OBL.1.sg.	ERG.pp.	彼ら OBL.3.pl.	DAT.pp.	iPodOBL.m.sg.ABL.pp.

gānā sunwāyā
 歌 NOM.m.sg. 聞かせる PERF.m.sg.
 「私は彼らに iPod で歌を聞かせた。」

(萬宮 2012: 184-185)

アルタイ諸言語に関してみると、まずモンゴル語で二重使役形（例えば、ugaa-lg-uul-「洗わせさせ-」）が高い頻度で用いられることは良く知られており、トルコ語にも二重使役形（例えば、otur-t-tur-「座らせさせ-」）が存在する（風間 2003: 298）。ツングース諸語ではきわめてまれであるが可能である。ナーナイ語の例では、ičə-wəəm-buwəən-「見させさせ-」のようになる。

日本語でも可能であるかどうか、試しに国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）によって、「せさせ」の文字列を用いて検索してみると、次のような例が見出される。したがって、文の容認度やその意味の二重使役性はさておき、少なくとも形の上では成立例がある程度以上あることがわかる。

マルコムにメディアの光を浴び-せ-させ-たのはクレイだったし、
 激しく事故って 11600 とか払わ-せ-させ-られてしまいました。

陸自の特殊部隊を力でねじ伏せられるか？ そして、それを従わ-せ-させ-ることができるか？

このように膠着的で任意である派生的文法カテゴリーの存在は、アルタイ型の言語の他の特徴と内的関連性を持っているとみたい。

2.2.3. 'conjunctive' participle

25 の 'past adverbial' or 'conjunctive' participles とは、簡単に言えば日本語のテ形に当たるもので、南アジアの言語を扱う言語研究者によって伝統的に用いられてきた用語である。英語では He looked into her eyes **and** closed the door. のように、連続して起きた動作を表現するのに and のような接続詞を使うのが普通である。しかしヒンディー語では「彼は彼女の目を見てドアを閉めた」、usne uskii āākhō mē **dehkar** darwaazaa band kar diyaa. のように、dehnaa 「見る」、という動詞の形が dehkar 「見て」のような形に変化することによって動作の連続を示す（以上の記述は Masica 1976 による）。

他方、アルタイ諸言語の研究では伝統的に継起副動詞（sequential converb）などの用語が用いられてきた。それは、(1) 終語形として用いることができない、(2) 終語形等と対立して屈折（活用）のパラダイムをなす、(3) 物語的連鎖（「私は朝起きてて、歯を磨いてて、顔を洗って、でかけた。」のような文）に用いられる、(4) 従属しているが埋め込まれていない、(5) 使用頻度がきわめて高い、(6) 等位接続から従位接続まで幅広い機能を持つ、などの共通特徴を持つものと考えられる。物語的連鎖は印欧語の多くでは定形動詞を接続詞でつなぐことによって表現される。したがって欧米の研究者には物語的連鎖が準動詞（非定形動詞、分詞や不定詞など）によって表現されることが理解しがたいことは想像に難くない

い。一部の研究者はこれらを準動詞とはみなさず、別の動詞形態 (medial verb) とし、その節も co-subordinate clause としようとする (パプア諸語からの発想という、Haspelmath 1995: 20-27, Foley and Van Valin 1984)。しかしテ形のような形は広い機能を持っているので、日本語のような言語では coordinate~co-subordinate~subordinate の間に明瞭な線を引くことができない。Bickel (1998) は、(3)の点に特に注目して、ヨーロッパ型に対する「アジア型副動詞」(Asian converb) を提案している。

したがって、このような動詞形を持つ言語の動詞連続においては、「鎖型動詞連続」(verb chaining など、亀井・河野・千野編 (1996: 1105-1107) を形成する。これに対し、ビー玉型動詞連続 (verb serialization)、団子型動詞連続 (co-ranking structure) では、動詞はすべて言い切り形となる。団子型では接続詞を用い、個々の動詞に主語が存在する傾向がある。鎖型は SOV の型の言語によくみられるという (亀井・河野・千野編 1996: 1106)。したがってアルタイ型言語の持つ他の特徴と、‘conjunctive’ participle の存在の間には、内的関連があると思われる。

さらに「連体形」に関しても同様のことが言える。ヨーロッパの印欧語のように、定動詞と分詞の形成方法及び機能が大きく乖離した言語では、(関係代名詞と定動詞による) 節と (分詞による) 句もはっきりと分かれる。菅野 (1990: 345-346) に「朝鮮語が西欧語のような重文と複合の厳密な区別をしえない言語であり、また関係代名詞の欠如により節と句の区別があいまいな言語であるという特徴は、その語順とともに日本語その他のアルタイ諸言語と全く同じである」と指摘されているとおりでである。インドでもドラヴィダ語族の言語ではこの点に関しても類似しているという。こうした連体節は Comrie (1998) のいう多機能的な「アジア型帰属節」と重なっているものと考えられる。

2.2.4. 補助動詞

27 の補助動詞の存在は、25 の‘past adverbial’ or ‘conjunctive’ participles の存在を前提としている点で 25 と関連している。[v1-て V2] のような構造で、高い頻度で現れる V2 が意味の上で文法化し、補助動詞化して [v1-て v2] のような構造に変化するということは十分に考えられる。接尾型の言語であれば、[語幹《語彙的意味を担う》-接辞《文法的意味を担う》] のような構成になっているため、後続する要素は文法化しやすいだろう。加藤 (2013: 97-124) は連体修飾節に関して、従属節の非節化>従属節減殺>単文化、というプロセスを提示しているが、連用的な修飾節においても事情は同じであるといえる。

しかし形態法が徹底して接尾辞のみによる言語であれば、こうした補助動詞は存在しにくいものではないかと考える。実際にアルタイ諸言語の中でも、モンゴル語族の言語の多くには補助動詞が揃っているが、ツングース語族やチュルク語族の言語では内部に差がある。ツングース諸語の大部分では補助動詞は発達していないが、モンゴル語や中国語と接触のある (／あった) ソロン語や満洲語、シベ語には多くの補助動詞がある。チュルク諸語でも中央アジアやシベリアのチュルク諸語には補助動詞が多く存在するが、トルコ語などでは発達していない。したがってアルタイ諸言語の内部では、補助動詞の使用や発達の度合いに差があることがわかる。河野 (1989) のいう「アルタイ型」言語の定義において、形態法がもっぱら接尾辞に偏っていることがどの程度重要なものであるかは現時点では明

らかではないが、補助動詞の使用に関しては他の特徴と内的関連を持つものとは考えにくい。

例えばトルコ語で現在進行を示す *-iyor₄* は、もともと *yorır* (現代語の *yürür* 「歩く」「進む」の中立形に相当する、林 1995: 33) に遡るが、意味が文法化したのち形の上でも縮約が起きて現在では接辞となっている(アクセントにその起源の痕跡を残している)。つまり、孤立型の言語であれば文法的な非自立要素がほとんどないため、意味の面で文法化しても自立語との関係は失われないが、接尾型の言語であれば補助動詞はさらに接辞化し得る。日本語でも *シテ シヤウ〜シヤウ*、*シテ イル〜シテ*、モンゴル語でも *xij-iž baj-na ~ xijžijn* 「している > してる」のような口語でのゆれが起きている。

Masica (1976: 146-147, 150-151) の補助動詞の表ならびに分布地図を見ると、使われる補助動詞の種類は系統を越えて隣接する言語間で類似していることがわかる。

まだまだ推測の範囲を出ないが、補助動詞に関しては影響によって広まる面が強いのではないだろうか。この点に関しては、今後各言語で使用される補助動詞とその地理的分布を詳細に検討した上で再考することにした。

2.3. 亀井・河野・千野編 (1996) についての考察

先に述べたように、亀井・河野・千野編 (1996) は、アルタイ型、という言語類型を提示してはいるものの、その類型の言語であると判断する具体的な諸基準などを示してはくれない。したがってここではその根拠について吟味することは不可能である。

この節では視点を変えて、言語間の類似が地域的要因に基づくのか、類型的要因に基づくのかを判断する方法について考察することにする。

2.3.1. 内的関連性

もし Masica (1976) が示すような諸特徴の間に内的(必然的)関連性があれば、それは地域的特徴であるかもしれないが、それと同時に類型的な特徴と考えられるだろう。

2.3.2. 他の地域における「アルタイ型」言語の存在

またそのような相関する諸特徴の束としての類型(たとえば、アルタイ型)が、世界の全く別の地域に見いだされれば、それが一つの類型であることはより説得的なものとなるだろう。例えば南米のケチュア語は上記のような点の多くを満たすアルタイ型言語と言えそうである。蝦名 (2007) ならびに蝦名 (p. c.) により、日本語とケチュア語の類似点と相違点について整理してみると次のようになる。

- ・似ている点：主要部後置型の語順(ただし定動詞の文での語順はかなり自由)、接尾辞のみ、態などの文法的派生接辞有(二重使役形有とする文献も)、have 無し、主題標識有、節と句の境界不明確、アジア型帰属節有、アジア型副動詞有、接続詞無し、準体法有

- ・似ていない点や問題点：形容詞名詞型、(所有)人称有、多項型人称標示、補助動詞無し、数量詞(数詞類別)無し、複合語はその認定に問題有、完全重複有、包括人称有

2.3.3. 他の地域における「アルタイ型」言語を見出すための方法 —今後の展望—

Haspelmath et al. (2005) では、2つの言語特徴を掛け合わせ、両方の特徴を合わせ持つ言語を絞り込むことが可能である。そこでここでは、アルタイ型の言語、もしくは日本語に類似した言語を探すために、「26. Prefixing versus Suffixing in Inflectional Morphology」と「81. Order of Subject, Object, and Verb」のデータを用い、SOVでSuffixingである言語を絞り込むことにした。このうちアルタイ諸言語、ウラル語族、チベット・ビルマ語族はその大半がこれに当たるため、いったんこれを除くと、その残りは下記のような言語であった。

アフリカ(18) : ガッラ、ソマリ、イラク (以上クシ) ; サイ、キミラ (杣) ; メンデ ; ヌビア etc.

北東中アフリカ(9) : アルチ、レスギ、アバル、グンスイブ ; チェチェン、イングーシ etc.

ニューギニア(36) : タニ、アスマット、ワボン、アマブ、カトマン、クオマ etc.

オーストラリア(15) : ウラティ、イレン、アヤラ、マルガン、ティヤリ (PN) ; ジンギリ etc.

北米(12) : アリュート ; ハイダ ; ポモ ; マトウ ; ワッポ ; チイマシ ; トウニカ ; ホビ ; ヤキ (YA) etc.

中南米(16) : ミスキト ; プリプリ、ティリビ、パエス (チブチャ) ; デサ ; ケユア ; ヒバロ etc.

アルタイ型の言語類型を確定するために、今後はこの上記のような言語に関して、どのような点が共通しているか、テ形のような副動詞的形式や派生的文法カテゴリーを持っているか、などの点について考察を進めて行くという方法が考えられる。

3. 結論

日本語は、歴史的にみれば、東北アジアという地域において、さまざまな言語接触を通じて形成されてきた言語であるが、その一方で一貫した主要部後置型の語順ならびにそれと連動する諸特徴を持つ「アルタイ型言語」としての類型的特徴を備えていると考えられる。

この「アルタイ型言語」は、東北アジアのみならず、他の地域にも該当する言語がある程度存在する一つの言語類型であると考えられるが、その具体的な内容（言い換えれば、互いに内的関連を持つ諸特徴の束）は、今後のさらなる研究によって少しずつ明確にしていかなければならないだろう。

次に、「アルタイ型」をはじめとする「言語類型」というものを確定するプロセスについて確認したい。そのプロセスは次のようにまとめることができるだろう。

- ①言語間で類似する確な諸特徴を選び出す（しかしこれは難しい作業であり、また、ある特徴に関して記述から情報の得られない言語があることも予想される）。
- ②その諸特徴の束には地域的連続性があるか調べ、その伝播の可能性を探る。
- ③その諸特徴の間には、内的な／必然的な関連があるか、考察する。
- ④もしあった場合には、そのように内的関連のある諸特徴の束（すなわちこれが類型）を持つ言語が他の地域にも見いだされるか、を探索する。

系統的な要因による類似は、音対応など別の経路により立証される系統関係によって確定されるので、問題は少ないと考えられる。他方、地域的な要因と類型的な要因を峻別することは難しく、上記の研究のプロセスはこの峻別を行うために必要なステップであるとも言えるだろう。

今後の課題や展望としては次の3点を挙げることができる。

・まず南米やニューギニアなど、現在記述の手薄な各地域の個別言語の記述が進まなければ上記の④のステップを行うことはできない。

・「アルタイ型言語」、すなわち連辞的な言語のカギとなる、「連体形」、「テ形」、複文などの要素の記述研究、対照研究、類型論的研究が必要である。他方、このような類型論的研究に対する必要性、という観点から言語記述にとって重要なポイントが明確になるものと考えられる。

参考文献

- アウステルリッツ, R. P. (1990) 「類型から見たギリヤーク語—日本語との関係において」
崎山理 (編) 『日本語の形成』 169-187. 東京: 三省堂
- Bickel, B. (1998) *Converbs in cross-linguistic perspective* [review article of Haspelmath and König, eds., *Converbs*, Berlin: Mouton de Gruyter 1995]. *Linguistic Typology* 2, 381 – 397.
- 朝鮮語研究会 (編著) (1989) 『朝鮮語入門』 菅野裕臣監修 東京: 三修社
- Comrie, B. (1998) *Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology*. W. Boeder et al. eds. *Sprach in Raum und Zeit, In Memoriam Johannes Bechert*, Band 2, 19-37. Tübingen: Gunter Narr.
- 蝦名大助 (2007) 「クスコ・ケチュア語」 中山俊秀・山越康裕 (編) 『文法を描く 2—フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 63-97.
- Foley, W. and R. D. Van Valin Jr. (1984) *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge Studies in Linguistics 38. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gil, D. (2005) 55. Numeral Classifiers. *WALS*. 226-229.
- Haspelmath, M. (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In Haspelmath and König (1995), 1-55.
- Haspelmath, M. (2005) 34. Occurrence of Nominal Plurality. *WALS*. 142-145.
- Haspelmath, M. and E. König (1995) *Converbs in cross-linguistic perspective: Structure and meaning of adverbial verb forms - Adverbial participles, gerunds*. Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, M. et al. (2005) *World Atlas of Language Structures*. Hong Kong: Oxford Univ. Press.
- 蓮見治雄 (1998) 「中国のモンゴル語あれこれ (3)」 『中国語』 462: 36-37.
- 服部健 (1955) 「ギリヤーク語」 市川三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説』 2: 751-775. 東京: 研究社

- 林徹 (1995) 『トルコ語 文法の基礎』(Ver. 2.1) 東京外国語大学語学教育研究協議会
 外間守善 (1971) 『沖縄の言語史』東京：法政大学出版局 101-128.
- 一ノ瀬恵 (1992) 「第 13 章 モンゴル語の語構成における非接尾辞的手法：北方の接尾辞
 型諸言語との対照をつうじて」宮岡伯人 (編) 『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂
- Jacobson, R. and L. R. Waugh (1979) *The sound shape of language*. Indiana: Indiana University
 Press.
- 山越康裕 (2001) 「モンゴル語および近隣諸言語の複数接尾辞と名詞句階層」『日本言語学
 会第 123 回大会予稿集』266-271. 日本言語学会
- 門脇誠一 (1992) 「朝鮮語・日本語と周辺の言語における名詞修飾構造：類別数詞との関
 係をめぐって」宮岡伯人編 『北の言語：類型と歴史』223-239. 東京：三省堂
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京：三省堂
- 菅野裕臣 (1990) 「朝鮮語—その系統論以前の諸問題」『日本語の形成』東京：三省堂
- 加藤重広 (2013) 『日本語統語特性論』札幌：北海道大学出版会 97-124.
- 風間伸次郎 (2003) 「アルタイ諸言語の 3 グループ (チュルク、モンゴル、ツングース)
 及び朝鮮語、日本語の文法は本当に似ているのか —— 対照文法の試み」『日本語系統
 論の現在』 日文研叢書 31、アレキサンダー・ボビン/長田俊樹 共編、国際日本文化
 研究センター 249-340
- 国語学会編 (1955) 『国語学辞典』東京：東京堂
- 河野六郎 (1989) 「I) 日本語の特質」亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第 2
 巻』1574-1588. 東京：三省堂
- 萬宮健策 (2012) 「ウルドゥー語のヴォイス」(特集「ヴォイスとその周辺」) 『語学研究所
 論集』17. 184-199. 東京外国語大学語学研究所
- Masica, C. P. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.
- 松本克己 (2006) 『世界言語への視座 歴史言語学と言語類型論』東京：三省堂
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語 日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂
- 峰岸真琴 (2000) 「類型論から見た文法理論」『言語研究』117, 101-127. 日本言語学会
- 西岡いづみ (2004) 「カザフ語指示詞の機能と体系」『日本言語学会第 128 回大会予稿集』
 149-154.
- 小田勝 (2010) 『古典文法詳説』東京：おうふう
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』東京：角川書店
- 下地理則 (2006) 「南琉球方言伊良部方言」中山俊秀・江畑冬生 (編) 『文法を描く—フィ
 ールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ—』東京外国語大学アジア・アフリカ言
 語文化研究所 85-117.
- Swift, L. (1963) *A Reference Grammar of Modern Turkish*. Indiana University Publications, Uralic
 Altaic series, Vol. 19. Bloomington: Indiana University Press.
- 竹内和夫 (1989) 『トルコ語辞典』東京：大学書林
- 田村すず子 (1988) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典 第 1 巻』
 6-94. 東京：三省堂
- 梅田博之 (1991) 『スタンダードハンゲル講座 2 文法・語彙』東京：大修館書店

On the Linguistic Type of Japanese:
Toward the Illumination of the “Altaic-type” Languages

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

If certain two languages are similar to each other, the reason of the resemblance may be either: 1. the genetical relationship, or 2. areal influence, or 3. typological result. In this paper I examine three preceding studies on Japanese based on each viewpoint of the three reasons above.

The conclusion is as follows: Japanese is a language which is formed through various language-contacts with other languages in North-East Asia. But on the other hand, Japanese has the consistent head-final word order, and has a set of features which are closely related each other. It means that Japanese is an “Altaic-type” language according to the suggestion by Kamei, Kōno and Chino (eds.) (1996).

(かざま・しんじろう kazamas@tufs.ac.jp)